

佐高 *SGH* 通信

スーパー グローバル ハイスクール

No. 19 (平成28年8月30日発行)

夏休み中のSGH活動レポート②

SGH福島フィールドワーク

夏休み中、8月8日から11日にかけて、SGHクラブ研究班・福島チーム(10名)が福島でフィールドワークに取り組みました。テーマは「原発災害からの復興」についてです。フィールドワークの概要を報告します。

1日目

～「福島大学つくしまふくしま未来支援センター」訪問～

本センターは、東日本大震災の復興支援のために建てられました。福島県内では全ての農作物に対して食品放射性物質検査機器による徹底的な調査を行っているなど、復興に向けた取り組みを知ることができました。また、本校生が佐野で実施したアンケート調査の結果を発表しました。



～講義「営農再開に向けての取組み、風評被害 他」～
小松知末先生に講義をしていただきました。農作物への徹底的な検査や管理をされており、現在では放射線検出量はほとんどなくなっています。しかし、風評被害はまだ根強く残っており、それをどう克服するかが課題であるとのことをお話をいただきました。



2日目

～川内村調査1～

遠藤雄幸村長が私たちのために話をしてくださいました。川内村は、2016年6月14日によりやく避難指示が全面解除され、復旧に向けて着々と歩みを進めていました。私たちには「今後生きていくうえで壁があっても、止まることなく立ち向かって乗り越えようとしてほしい。」というメッセージをいただきました。



～川内村調査2～

「株式会社 KiMiDoRi」を見学しました。「完全密閉栽培」(室内での水耕栽培による新しい形態の農業)を行っており、安全・安心な無農薬野菜(主にレタス)を生産していました。天候に左右されず、洗わずに食べられる野菜には、大きな需要があるそうです。



～川内村調査3～

ワイン用ブドウ畑を見学しました。除染した山の斜面に大勢のボランティアが集まり、1本1本ブドウの苗を植えたそうです。畑を管理されている方は、復興支援のために自ら志願して、徳島県から川内村に出向いて働いていました。

東京オリンピック開催時に、海外から来る方に川内村産のワインを飲んでいただくことが目標だそうです。



～「福島県立ふたば未来学園高校」(SGH校)訪問～

福島県立ふたば未来学園高校を訪問しました。原発災害からの復興を目指すグローバルリーダーの育成をコンセプトに活動しています。本校の研究結果を発表した後、班に分かれて、これからの福島を盛り上げるために何ができるかについてディスカッションを行いました。



～櫛葉町視察～

櫛葉町復興推進課長の猪狩充弘さんに案内していただきました。櫛葉町は、2015年9月5日、全域に出されていた避難指示が解除されましたが、まだ9割近い住民が帰還していません。櫛葉町は「コンパクトタウン」の建設など、住人が住みやすい町を目指して復興の活動を進めていました。



3日目

～櫛葉町住民インタビュー～

仮設住宅内にある「サポートセンター櫛葉」にて、避難解除になっても櫛葉町に戻らずここで暮らしている方にインタビューを行いました。高齢者が多く、思い出したくない記憶もあり、涙ながらに話してくださったのが印象的でした。たくさんの質問に答えていただきましたが、“将来は櫛葉に戻りたい”という思いは全員共通でした。



～富岡町視察1～

居住制限区域である富岡町を視察しました。そこで震災被災パトカーを見ることができました。双葉署の2名の警察官が避難誘導に走っていた最中に津波に巻き込まれ、殉職されたときに乗っていたパトカーです。震災の記憶を伝える遺産として双葉署の北側にある公園に設置されて以来、献花台に花を添える人が絶えないということでした。



～富岡町視察2～

JR 常磐線の富岡駅の視察に行きました。駅舎は津波で流されてしまったため、現在復旧活動が行われている最中です。実際に復興作業を行っている人たちの姿を間近に見ることができました。震災からすでに5年以上経過していますが、この事実を風化させることなく、周囲にも、後世にも伝えていきたいと思いました。



4日目

～研修成果発表会～

最終日に研修成果の発表を行いました。A 班は「農業に関する復興の状況やこれからの課題」、B 班は「原発災害やその復興に関する福島と佐野での意識の違い」について発表しました。どちらの班も、この研修で見たことや聞いたことを織り交ぜ、今後福島復興支援のために自分たちに何ができるかを考えていました。本研修が非常に有意義であったことが伝わってきました。以下、チームのメンバーが4日間のまとめとして書いたものの一部を紹介します。

○避難している住民の考えは様々であり、一括りにしてはいけなことを学んだ。

(2年 猿山 綾乃)

○私たちが外から見たり考えたりしていることと、福島の方が体験していることの違いに気付くことができた。

(2年 立野 絢子)

○この研修で得たことを佐高生や多くの方々に伝えていくなど、今自分にできることをしていきたい。

(1年 鈴木 紅音)

○多くの方々から震災当時のことを聞くことができた。ここで感じたことは忘れてはならないと思う。

(1年 江田 悠紀)

○この研修での経験をまず両親、兄弟、祖母に伝えたい。そして佐高生をはじめ、多くの方々に伝えていこうと思った。

(1年 野原 悠似)

○実際に福島に行った経験を皆に知ってもらい、皆で解決していきたい。

(1年 高橋 空良)

○調べたこととは違うことや知らなかったことがたくさんあった。正しい知識を伝えることが大切である。

(1年 竹澤 宏征)

○最も強く印象に残ったのは、被災者の頑張ろうという前向きな姿勢だった。

(1年 山田 萌果)

○同世代の方とのディスカッションの機会があり、今後の活動に生かすことができた。

(1年 古谷 菜奈)

○本当の復興とは建物などを直すだけではないということを知った。

(1年 倉持 未夢)



福島チーム（10名）と福島大学の先生方

お知らせ

今回の福島フィールドワークの研究成果を、旭城祭（9/3（土））で発表します。

旭城祭当日は、SGH クラブの研究展示コーナー（教室棟3F）にもお立ち寄りください！

また、本フィールドワークの詳細は、栃木県立佐野高等学校のHPに掲載しています。是非ご覧ください！